

What ISIT?

ISIT:Institute of Systems & Information Technologies/KYUSHU

<平成19年1月26日>

ロボットタウンプロジェクト公開実験および講演会 開催

1月26日、福岡市東区のアイランドシティ中央公園にある実験住宅において「ロボットタウンの実証的実験」中間報告の公開実験が行われました。この実験には九州大学をはじめISITや企業などの研究機関が参画しています。

今回の公開実験のメインの一つである「ロボットタウンと車いすロボットとの結合実験」にはISIT第3研究室が大きく関わっており、木室義彦第3研究室長ほか、有田大作、家永貴史、千田陽介の各研究員が参加しました。

当日は雷や雹まで降るあいにくの空模様で公開実験の開催が危ぶまれましたが、この日に向け準備を重ねてきた研究員の努力に報いるように実験開始直前に雨が上がり、福岡の新聞・テレビなどマスコミ各局が見守る中、日本で初となる、環境から支援される車いすロボットの公開実験を無事開催することができました。

実験は、利用者の車が駐車場に入るとその車の近くまで車いすロボットが利用者を出迎え、利用者から荷物を受け取り住宅の玄関まで運ぶ這一連の動作を、車いすロボットが住宅や駐車場など各所に配置されたカメラやRFIDタグから情報を受け取って自律的に行うというものです。実験準備中に降った雨で車いすロボットが濡れたせいか途中走路をはずれる場面もありましたが、無事役目を終えて「ロボット小屋」まで帰りつき、成功のうちに実験を終了することができました。日頃ISITのオフィス内を実験場として動き回っている車いすロボットですが、テレビ各局ごとの撮影のため、何度もリポーターと一緒に動いているその晴れ姿を見て、私たちISIT職員も誇らしく思いました。

ISITはロボットタウンの中核となるタウンマネジメントシステム(TMS)の設計にも大きく関わっています。TMSとは、住宅や街中に設置



されたRFIDタグやカメラ、そしてロボットから得られた情報をネットワークを通じて統合・管理するもので、街中の人がロボットなどの移動体の状況をリアルタイムに認識・把握し、個々のロボットにその周囲の障害物情報などを与えることによって、その動作および作業を支援し、作業目的を達成させるものです。ISITでは、ロボットが動くためだけの環境ではなく、人間にとっても自然で快適な環境を構築するロボットタウンという新しいシステムの研究を今後も進めていく予定です。

また公開実験に先立ってロボスクエア（博多リバlein内）で行なわれた「次世代ロボット連携群第3回講演会」では、木室室長が約70名の参加者の前でTMSの機能について講演を行ないました。

REPORT I.

第2研究室 国内外の研究交流 相次ぐ

ISIT 第2研究室では、今年に入りシンガポールや韓国などの海外研究機関との研究交流や、九州 IT-Office セキュリティ検討会の開催など大きな研究活動が相次ぎました。ISIT ではアジア各国の研究機関と協力して、情報セキュリティ分野における国際競争力のある研究開発を行なっています。

「シンガポール国立インフォコム研究所I²Rとの研究交流会」

<平成 19年 1月 15日>

去る 1月 15日、シンガポール国立インフォコム研究所(I²R:Institute for Infocomm Research)の Jianying Zhou 博士を ISIT に招待し、ISIT 第2研究室、九州大学 櫻井研究室、KDDI 研究所との研究交流会を行ないました。I²R はシンガポール科学技術庁の研究機関の一つとして 2002 年に情報技術研究所をはじめとする幾つかの研究機関が集まって設立されたもので、コミュニケーション、コンピューティング、メディアの 3 つの部門でネットワーク・システムセキュリティ、音声認識、ワイヤレス通信などの研究を推進しています。研究交流会では Zhou 博士による「Mobile IP Security」の研究紹介のほか、それぞれの機関の活動紹介と研究事例紹介が行なわれました。



ISIT では I²R と情報セキュリティ分野での共同研究協定を締結することを予定しており、さらなる国際的な連携を強化していきたいと考えております。

「第2回 NICT 国際ワークショップ(IJWISA2007) 開催」

<平成 19年 2月 5日～6日>

2月5日～6日の2日間、韓国ソウル市ミョンドンにある Hotel Ibis にて、第2回NICT国際ワークショップ(IJWISA2007)を開催しました。ISIT は独立行政法人情報通信研究機構(NICT)より国際共同研究助成金を受け、櫻井幸一-ISIT 第2研究室長(九州大学大学院教授)を研究代表とするアジア情報社会セキュリティ基盤研究チーム(ISIT、九州大学、KDDI、中国清華大学、韓国高麗大学校、韓国電子通信研究院)を組織し、ユビキタス環境における安全性確保に向けた情報セキュリティ技術の研究を行なっています。

2回目の開催となる今回は、ホスト開催機関となった韓国高麗大学情報セキュリティ技術センター(CIST)をはじめ 5カ国(日本、韓国、中国、シンガポール、タイ)11 の研究機関から約 40 名の研究者が参加し、ISIT からは櫻井幸一第2研究室長、上繁義史、高橋健一、藤井雅和の各研究员が参加しました。折しも 600 年に一度という黄金豚年を祝うイルミネーションがまだ残るソウルの繁華街ミョンドンのホテルでの開催ということで、会議の雰囲気も終始明るく、研究成果に対する意見交換の場として、また研究者同士の交流の場として、貴重な機会となりました。

1日目の終わりに催された懇親会では、お互いの研究協力を誓うほか、次回ワークショップは福岡で、という声が多く、ISIT としてもそれが実現できるよう今回の成果を今後の研究活動に生かし、より有意義な研究交流が広がるよう努力していきたいと思います。



「第5回九州 IT-Office セキュリティ検討会」

<平成 19年 2月 9日>

ISIT 第2研究室は地元九州での IT セキュリティの研究開発・ビジネス展開における産学官の連携推進の一環として、『九州 IT-Office セキュリティ検討会』を開催しています。5回目となる今回は、講師として情報セキュリティにおける新しい国際標準化の動きの中で国際標準委員会の委員として最先端で活躍されている山崎哲氏(IBM ビジネスコンサルティングサービス株式会社 チーフセキュリティオフィサー)を迎、講演をいただきました。

社会的に個人情報や経営情報等の重要な情報保護への関心が高まる中、企業に対するセキュリティ要求も、従来の個人情報保護法への対応に留まらず、SOX 法などの新たな法令や規制への遵守要請や、国際規格遵守の要求など、より高度なものへと変化してきています。講演では、これらの要求を解決するための強力な道具となる情報

セキュリティマネジメントシステム(ISMS)の確立と、この ISMS の考え方の支柱となっている情報セキュリティの新しい国際標準である ISO27000 シリーズについて解説いただきました。



「Korea-Japan Joint Workshop on Security and Privacy 開催」

<平成 19年 3月 16日>

去る 3月 16 日、韓国水原市の成均館大学校にて「Korea-Japan Joint Workshop on Security and Privacy」が開催され、ISIT から上繁義史、高橋健一、藤井雅和の各研究员が参加しました。日本側からは ISIT の他、九州大学大学院の堀良彰助教授 (ISIT 特別研究员) と Sang-Soo Yeo ポストドクターの参加のみでしたが、新学期が始まったばかりの韓国側は、ホストの成均館大学校をはじめ、7 つの大学から多くの研究者・学生が集まり、各研究機関の良い意見交換の場となりました。成均館大学校の情報保護認証技術研究センターと ISIT は昨年 11 月 6 日に情報セキュリティ分野での研究協定の覚書 (MOU) を締結しており、今後も研究交流を深めてまいります。



講演中の上繁義史研究员 (平成 19 年 4 月より
長崎大学情報メディア基盤センター准教授に就任)

第56回定期交流会

「IT技術を活用した住宅生活見守り技術」

松岡 克典氏 独立行政法人産業技術総合研究所 研究業務推進部門長

65歳以上の高齢者1人に対する20~64歳以下の方の割合が、1990年には5人だったものが、2020年には2人に減少すると予想されています。このように少子高齢化が進むと、今までのよう人が人を見てあげることはできなくなるでしょう。これは予想ではありません。間違いなくそういうなります。でもそれでは今の生活の状態は維持できなくなってしまいます。だから生活を「見守る」という技術が必要となってくるのです。「見守る」というのは、技術が人を支援するというのではなく、「人と人をつなぐ」技術であるということが大事なポイントです。多くの人は、機械に支援してもらうよりは、人に支援してもらいたいと思っています。ですから1人の人がたくさんの人の面倒を見ることができるシステムが開発できれば、人に支援してもらうことができる機会が広がってきます。「今この人を支援してください」というタイミングに気づくことができる技術があればいいのです。この「気づき」が一番大事なのです。

あまり知られていませんが、現在既に家庭内の不慮の事故による死者数は、交通事故による死者数を上回っています。高齢者にとって、住宅内はそんなに安全ではないといえるかも知れません。単身の高齢者が急速に増えている今、異常な状態に気づいて対処することの必要性は誰でもおわかりだと思いますが、「早さ」が大事なのです。異変発生から対処するまでの時間が1時間以内であれば生存率も高く、また多くの方が元の生活に戻ることができるというデータがあります。この1時間以内の異常検知が技術開発目標になってくるし、そこにビジネスチャンスがあると思っています。

しかしながら、異常発生時に、瞬時にこれを異常と判断するのは非常に難しいことです。これは普段の生活を理解することによってのみ、その「違い」を異常として検知できるのです。それも個人個人に合わせた生活の理解が必要です。その人の普段からの状態を見守り、生活ぶりを観察してそのデータを情報として蓄積することができると、その人個人に合わせた生活見守りが可能となります。



さて「くらし情報を用いた生活見守り」技術には、①ウェアラブルセンサーや家電品などをを使った計測技術②それらの情報を一元的に集めるための情報ネットワーク技術③情報を解析して人間の状態などを理解する知識化技術④解析された情報をを使った支援技術という4つの技術が同時に働くことが大事です。

私たち産総研では実験住宅で2種類の実験を行ないました。ひとつは被験者に姿勢や活動量などを計る加速度センサーを内蔵したウェアラブルセンサーを身に着けてもらい、住宅内の各部屋に167個の読み取りセンサーやカメラを設置して人の生活をどこまで理解できるのかを調べる実験。もうひとつはコストを抑えて、蛍光灯の中に赤外線を感知する簡単な人感センサーと20個の家電製品に電力量センサーを配置して異変をどれだけ感知できるかという実験です。

まずウェアラブルセンサーを用いた1ヶ月間の実験では、生活行為を13種類に分類し、センサーがリアルタイムに読み取り解析した生活行動情報を生活行為分類にあてはめて実際の生活行為と比較したところ、7割くらいの割合で一致するという結果が出ました。つまりそれくらいの確率でその人の生活行動が推定できるということです。

また簡単なセンサーを用いた1ヶ月から1年という長期の実験では、生活パターンを知ることができました。その人の「普段度」を基準として今日はどれくらい違っているかを調べることにより、異変を検知できます。リアルタイムでの異常検知は難しいですが、短い時間のうちにそれを誰かに知らせることが可能だと思います。

さて、これらの生活見守り技術がどのように私たちの将来の生活を創ってくれるのでしょうか。私たちは「人とのつながり」「人と環境の調和」、この2つの要素がこれから技術に大切であると考えます。「人とのつながり」の面では、離れ離れになっている高齢者の暮らしぶりを知らせることにより家族を繋ぐことができます。医者や介護者などのコミュニティに生活ぶりを知らせることにより地域を繋ぐことができます。また個人適合型の生活アドバイスにより健康に繋げることができます。

また「人と環境の調和」の面では、生活状態や気分に合わせて照明や空調、音響、香りなどを調節する部屋や、生活ぶりを知っている防犯・防災・省エネに優れた賢い住宅などに活用できるでしょう。

ここで大きく問題になるのはプライバシーの問題ですが、ユーザーがくらし情報を住宅内に管理・保管しておき、自分が許容した情報だけをサービス会社に提供するというようにユーザー自身が選択できることが重要だと思います。

くらしの豊かさ、つまりQOLの向上とは何でしょう。生活価値観というのは人によって違います。しかし健康・生活サービスを提供するという観点で考えると、生活価値観を知る一つの手段としてくらし情報は役に立つのではないかでしょうか。最先端のITでなくても、既にあるITを使って生活を見守ることは可能です。今後蓄積されたくらし情報を基にしてQOL向上への暮らし方の提案・生き方の提案をするという新しいサービス産業の創造が期待されます。

「南インドＩＴミッションに参加して」

レポート：研究企画部 部長代理 弥永 和浩

2006年11月27日から12月3までの7日間、「インドとの経済・人材交流を推進する協議会」の主催により行なわれた南インドITミッションに参加し、IT産業の盛んな南インドのバンガロール（カルナータカ州）、チェンナイ（タミル・ナードゥ州）を訪問した。ISITによるインド交流ミッションへの参加は2005年11月の牛島所長、2006年9月の小宮専務に統一して早くも3回目となる。2005年11月は福岡市長が団長となった行政や大学レベルを中心とした交流の足掛かりの構築、2006年9月は州政府からのITイベントへの参加要請であった。今回のミッションはこれまでのミッションで築かれた両者の関係を更に発展させるもので、民間企業の交流を中心としたより実質的なものとなっている。福岡市、北九州市のインドとの交流に興味を持つIT関係を中心とした企業7社が参加しており、ISITもIT関係のオブザーバーとして参加した。7日間の日程であるが、インドに滞在したのはバンガロール2日間、チェンナイ2日間の計4日間のみである。今回は往復共にバンコクでの乗り換えであったが、行きは1日、帰りは2日（バンコクで20時間待ち！）かかるのである。ここが韓国や中国と比べてまだまだ馴染みが薄い理由の一つと思われる。ミッションの内容は、福岡からの参加企業と南インドのIT産業を中心とする企業との交流会、カルナータカ商工会議所連盟とのMOU（覚書）締結、タミル・ナードゥ州IT省の表敬訪問、IT関連および自動車関連の企業視察と盛り沢山である。

○バンガロール

まずはカルナータカ商工会議所連盟とのMOU締結が行なわれた。調印はカルナータカ商工会議所連盟のプロヒット会長と福岡商工会議所の橋本専務理事により取り交わされた。カルナータカ側からは今回の訪問とMOU締結の御礼とともに、バンガロールの気候、インフラ、技術力などの優れた点が説明された。確かにデカン高原に位置するバンガロールは1年を通して穏やかな気候であり、別名ガーデンシティと呼ばれるように緑の多い町である。トヨタやスズキなど日本の工場が多く立地している要因にもなっている。



カルナータカ商工会議所連盟とのMOU（覚書）締結

・プレキション・テクノロジーズ社訪問

次に訪問したのは3D-CADに強いエンジニアリング企業のプレキション・テクノロジーズ社である。自動車や航空機の分野に強く、既に日本の自動車企業との取引も行なっている。まだ日本に拠点を持っていないが、2006年3月に福岡で開催されたインド・ビジネス交流会にも参加しており日本とのビジネスには力を入れている。顧客ごとに仕切られた開発ルームでは大勢の技術者がCADの画面に向かって作業を行なっていた。

・バンガロール企業交流会

バンガロール初日の最後はバンガロールの企業との交流会である。まずはバンガロール側の挨拶、福岡からの参加者全員への歓迎の首飾りの贈呈が行なわれた。そして今回のミッションの団長である福岡市経済振興局国際経済部の中島部長の挨拶、ビデオとPowerPointによる福岡市の紹介、今回のミッション

に参加した福岡の企業によるプレゼンテーションに続いて立食による企業交流が行なわれた。約40～50社参加したインド側の企業からは福岡の企業に対して次々と話を持ち掛けられ、インド企業の日本に対する期待の大きさが窺われる。実際はテーブルと椅子も用意されていたのだが、殆ど座る時間がない状況であった。ミッション終了後に行なわれた今回のミッションに関するアンケートでは、交流会の時間が短いという意見も多く寄せられたほどである。ちなみに交流の主役は企業から参加した人なのだが、私も首飾りをしていたためインドの企業の人から次々と話しかけられた。日本側企業の人には一人ずつ通訳の人が付いていたが私にはいなかったため、片言の英語での対応に冷や汗をかいた。

・タタ・コンサルタンシー・サービス社訪問

バンガロール2日目は、IT企業のタタ・コンサルタンシー・サービス社と自動車生産企業のトヨタ・キルロスカ・モーター社の視察である。ホテルからバスで1時間ほどかかって最初の目的地のタタ・コンサルタンシー・サービス社のあるITパークに到着するのだが、途中の町並みは古い建物が目立つに対し、ITパークの敷地に一歩入ると芝生の敷地に近代的なビルが立ち並ぶ全くの別世界である。インドにおけるIT産業の急速な発展ぶりが窺われる。タタ・コンサルタンシー・サービス社はインド最大財閥のタタ・グループの一員で、7万4千名の従業員を擁している（グループ全体では21万5千名で、その売上げはインドGDPの2.7%に匹敵する）。今回訪問したITパーク内だけでも約2千名が働いているということであり、その規模の大きさには驚かされるが、顧客先ごとに分かれた開発室は高いセキュリティで守られており、残念ながら実際に働いている現場を目にすることができなかつた。高い英語力と技術力を持つインドのIT産業は、アメリカやヨーロッパの顧客を中心に発展した歴史があり日本との取引はまだまだ小さい。タタ・コンサルタンシー・サービス社においてもアメリカ、ヨーロッパの売上げが約80%を占めるが、既に横浜に開発センターを設置しており、日本とのビジネスもこれから伸びて来るものと期待される。

・トヨタ・キルロスカ・モーター社訪問

次にバスで2時間ほど郊外に走り、広々とした高原地帯に立地するトヨタ・キルロスカ・モーター社の工場に到着した。ここでは2直交代制で年間6万台の自動車を生産している。生産車種はインドでは高級車に該当するカローラ（価格は約100万ルピー：約270万円）と低価格の多目的車のイノーバ（70万ルピー：約190万円）である。IT産業の中産階級の年収が60～70万ルピーとのことで、車としてはこれよりも低価格のものが主流となっており、古くから合弁会社を立上げ小型車を中心に展開しているスズキ自動車とトヨタ・キルロスカ・モーター社を比べると、日本と正反対のシェアとなっている。工場内も見学させてもらったが、人件費の安さと生産規模の小ささから、自動化は極力行なっておらず、日本ではロボットが行なう溶接も手作業で行なわれていた。しかしビジュアルマニュアルによる人材育成や提案活動による職場の活性化など、トヨタのノウハウを随所に見ることができる。民主主義が根付くインドでは自分の権利に対する主張が強く、ここトヨタ・キルロスカ・モーター社でもかつて大規模な労使紛争を経験しているが、今では年間290日の稼働日数を達成している。また、電力インフラの悪さを補うため50%を自家発電でまかなっているほか、工業用水を確保するための巨大な貯水タンク、入金を確認するまで完成車を駐留しておくプール場など、インドならではの苦勞も見ることができた。

～アジアIT通信vol.3 特集インド～

○チェンナイ

夕食後、次の訪問地であるチェンナイへ空路移動した。国内線ではあるがデロヘへの警戒は非常に厳しく、飲料や電池の機内持ち込みは禁止されており、ボディチェックも厳重である。チェンナイの最初の訪問先はタミル・ナードゥ州IT省である。政府の施設も警備が厳重で、銃を構えた兵士に囲まれており、敷地内に入る時には手荷物検査を受けた。更に建物内は撮影禁止のため、カメラも預けることとなった。しかし建物自体は英國統治時代のものであろうか、木造の大変古いもので、扇風機が回っている部屋もあった。IT省からはタミル・ナードゥ州の投資環境についての説明があり、インフラの整備が他の州より進んでいる点や技術系人材の豊富さが協調されていた。

チェンナイ初日の最後はバンガロールと同様に地元のインド企業との交流会である。ここでもバンガロールと同様にインド企業からの積極的なアプローチが見られた。

チェンナイ2日目は、インド最大の自動車部品メーカーであるルーカスTVS社、大学・病院・ITサービス・ホテル・旅行業等を展開しているSRMグループのSRM大学とSRMテクノロジーズ社、IT企業のマイブルズESMテクノロジーズ社の企業視察である。



タミル・ナードゥ州IT省近くにて

・ルーカスTVS社訪問

ルーカスTVS社では最初に会議室で企業概要の説明を聞いた後、工場の見学を行なった。写真撮影は禁止であったが、作業をしている人の邪魔になるのではないかと思えるくらいラインの中まで入って見学させてもらった。この企業では日本の講師を招いて日本式の品質管理を実践しており、工場内にも「KAIZEN」や「5S」の文字がいたる所に掲げられていた（英語の「5S」とはSort（整頓）、Set In Order（整頓）、Shine（清掃）、Standardize（清潔）、Sustain（しつけ）である）。見学後に再び会議室に戻った際、社長が「今回の見学で何か改善するところがあつたら教えて下さい。」と言われ、改善の意識が身に染みていることが感じられた。また、次の世代の技術者を育てることが課題ということで、日本の製造企業におけるOJTによる研修を望んでいた。第1次産業から一気に第3次産業へ進んだインドは第2次産業が弱いと言われており、こういった分野での日本企業との協力関係も今後重要なと思う。

・SRM大学のKattankulathurキャンパス訪問

次に高速道路を約1時間走りSRM大学のKattankulathurキャンパスに到着した。キャンパス内は若い学生の活気が溢れ、見学したIT研修室でも多くの学生が熱心にパソコンに向かっていた。SRM大学では日本企業に対してIT技術や英会話の新人教育を行なっており、既に200名の実績を持っている。また、敷地内には寮、病院、ホテルもある。病院では地域の住民を無償で診察しており、送迎も病院の無料バスで行なっている。これは、地域貢献とともに、大学の研修のための患者の確保という意味もあるとのことである。

・マイブルズESMテクノロジーズ社訪問

SRM大学から次の訪問先のマイブルズESMテクノロジーズ社に行くため、再びチェンナイ市街方面へと向かったが、

途中の道沿いでタタ・コンサルタンシー・サービス社、インフォシス・テクノロジーズ社、サティヤム・コンピュータ社、HCLテクノロジーズ社の近代的な建物を見かけた。建物の近くにはそれぞれの社名の付いたバスが停まっており通勤の足の確保は大変のようである。また、建物は確認できなかつたがウイップル・リミテッド社のバスも見かけた。ここに挙げた5社がインドIT企業の売上げ上位5社である。さて、マイブルズESMテクノロジーズ社に着いて一番に目に付くのが屋上の「マイブルズ」とカタカナで書かれた看板である。この企業が日本を重視している姿勢が窺われる。主な事業はITマネジメントサービス、エンジニア養成サービスである。日本でも最初の支店を石川県に開設しており、4月より主に東京の顧客を対象とした教育事業を開始する予定である。



マイブルズESMテクノロジーズ社

・SRMテクノロジーズ社訪問

最後の訪問先はSRMテクノロジーズ社である。SRMテクノロジーズ社は日本において東京、大阪に次ぐ営業所を2006年6月福岡市に開設しており、既にご存知の方も多いのではないかと思う。SRMテクノロジーズ社はここチェンナイに本社を置く従業員約250名のIT企業であるが、売上げの95%が日本企業との取引であり、アメリカやヨーロッパの顧客を中心に発展してきたインドIT産業の中では特異な存在である。仕様変更が多い日本企業との仕事にも柔軟に対応し、契約に関しても「紙よりも「心」を大切にする」と言うなど、日本式のビジネスに精通している。建物内を見学させてもらったが、サーバのディスプレイには全て日本語版Windowsが表示され、名刺交換する際は日本語で挨拶をしていただいた。そして会議室の壁には日本企業からの感謝状が並んでいた。業務的には、売上げの70%がWeb系アプリケーション、20%が組込みソフトである。組込みソフトは全て自動車関連であり、自動車産業の集積が進む九州にとっては頼もししい存在である。



SRMテクノロジーズ社

今回のミッションでは企業交流や企業視察を通じてインドの様々な企業を知ることができたが、これを機会に福岡の企業とインドの企業との間で新たなビジネスが生まれることが期待される。冒頭でインドとの移動時間の問題を挙げたが、時間がかかるのは人や物の移動であって、ネットワークを介したデータの移動には時間はかかるない。従って共同で事業を行なうのは、IT分野が一番可能性が高いと考えられる。インドにはSRMテクノロジーズ社やマイブルズESMテクノロジーズ社のように日本をターゲットとするIT関連企業もあり、このような企業との関係を深めるとともに、行政や経済界が一体となった取り組みを行なうことにより、福岡が日本におけるインドビジネスのアドバンテージをとができるものと考える。ISITもIT関係の専門機関として少しでもその役に立てるよう努力して行きたい。

「インド組込みソフトセミナー」にて ラオ研究員が講演

2月26日、JALリゾートシーホークホテル福岡において「インド組込みソフトセミナー」が開催されました。福岡市や北九州市の産学官でつくる「インドとの経済・人材交流を推進する協議会」と独立行政法人日本貿易振興会（JETRO）が日本未進出のインドIT企業を招聘し、今後マーケットの拡大が見込まれる組込みソフト分野に焦点をあてて開催したもので、IT業界において世界有数のめざましい進歩と発展を遂げているインドの企業とのパートナーシップの可能性を探るため、地元福岡を中心に多くの企業が参加しました。

このセミナーにおいて、福岡市がIT関連産業の活性化を図る目的でインド最高峰の理工系大学院であるインド科学大学院大学からJETプログラムにより招致した、ISIT第1研究室のプラディープ・ラオ研究員が講演を行ないました。ラオ研究員は「インドの教育事情」と題して、優れた技術者を輩出し続けているインドの教育システムについての説明と、ラオ研究員自身の来日してからの経験を交え、今後インドと日本の企業がパートナーとして協力していくことへの展望を語りました。

またセミナーに先立ち、今回招聘されたインドIT企業4社9名の方々がISITを表敬訪問されました。ISITからは森光研究所次長がISITとSRP地区の紹介を、また今回のセミナーを共催している九州組込みソフトウェア研究会（QUEST）の



芦原秀一事務局長((株)ネットワーク応用技術研究所 取締役R&D部長)が九州における組込み業界の現状を説明し、参加者から熱心な質問を受けていました。

New Staff

新スタッフ紹介

(3月末現在、ISITスタッフ総勢52名)

所 属 役 職 氏 名
第2研究室 研究員 藤井 雅和

みなさま、はじめまして。藤井雅和（ふじい まさかず）と申します。2007年1月1日付けで日立電子サービス株式会社（略称：DENSA）より出向し、ISIT第2研究室へ着任しました。DENSAは、システムの企画・調達・設計・構築・導入・運用、保守まで、ハード／ソフト一体となったワンストップの統合サポートサービスを提供している日立のグループ会社です。

私はDENSAで10年仕事をしてきましたが、最初の5年間はコンピュータの保守員をしていました。保守員というのは、24時間365日のサポート体制のもと、コンピュータが故障したら即座に修理して、お客様のシステムの安定稼動を支援するエンジニアです。保守員というのは大変な仕事です。



韓国成均館大学校にて講演中の藤井研究員

平成19年2月26日

当たり前といえば当たり前ですが、コンピュータはこちらの都合は結構なに壊れます。保守員当時は、真夜中に呼び出されトラブル対応をすることがよくありました。その後、セキュリティ商品を提案するソリューション営業部へ異動し、主にファイアウォールや秘文（情報漏洩対策ソフト）といった製品をお客様に提案しておりました。その営業活動を通じて、セキュリティ対策は重要であると感じていました。

私が着任した第2研究室は、セキュリティ技術に関する研究から運用・法制度に関する調査活動まで幅広く行っています。また海外、特にアジア各国との研究交流も活発で、すでに複数回の国際的ワークショップに参加させていただきました。そのようにいろいろな意味で幅広い研究開発活動に少しでもお役に立てればと思っていますので、今後ともよろしくお願ひいたします。

ISIT市民特別講演会開催のお知らせ

テーマ：「生物からまなぶIT」(仮)

講 師：赤池 学 氏 (科学技術ジャーナリスト)
株式会社ユニバーサルデザイン総合研究所 代表取締役所長

日 時：平成19年 7月10日(火)13:30～15:30

会 場：福岡市役所 15階講堂

37億年という進化の過程で安全性と機能が確認されている「時を経た技術」を持つ生物に学びITに活用する。テレビの科学情報番組等で活躍している赤池学氏を講師に迎え、自然界や生物が持つ素晴らしい技術が現在どのように活用されているか、また私たちの将来のためにどのように活用すべきなのかについて、わかりやすくお話をいただきます。詳細につきましては、5月中旬にISITホームページ、メールマガ等でご案内いたします。

問い合わせ：TEL 092-852-3451 事業部 担当：有吉・牧野



貴重な情報交換、誠にありがとうございました。
平成19年1月以降の主なご来訪者[一覧]

| | | |
|------|--|-----|
| 2/23 | 「インド組込みソフトセミナー」一行 | 13名 |
| 2/28 | 独立行政法人産業技術総合研究所 | 1名 |
| 3/ 1 | 文部科学省研究開発局 | 2名 |
| 3/ 5 | Johan Myrsten記者 他 (スウェーデン・Svenska Dagbladet紙) | 4名 |

ISITメールマガジンでは、ISIT主催の定期交流会や各種セミナーの情報、定期発行のお知らせ、現在公募中の情報など配信しております。
<http://www.isit.or.jp/magazine/form.html>よりお申し込みいただけます。

■発行■

財団法人 九州システム情報技術研究所 ISIT
Institute of Systems & Information Technologies/KYUSHU

〒814-0001

福岡市早良区百道浜2丁目1-22-707〈福岡SRPセンタービル（もちキューブ）7F〉
Fukuoka SRP Center Building (Mochi Cube) 7F 2-1-22, Mochihama,
Sawara-ku, Fukuoka City 814-0001
TEL 092-852-3450 FAX 092-852-3455
URL:<http://www.isit.or.jp> E-mail:koryu@isit.or.jp
制作:株式会社 ドミックスコーポレーション



古紙配合率100%再生紙を使用しています